



TITLE:

会員静動 + 松岡道治先生の御長逝 を悼みて

AUTHOR(S):

CITATION:

会員静動 + 松岡道治先生の御長逝を悼みて. 日本外科宝函 1953, 22(5):
572-572

ISSUE DATE:

1953-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/206013>

RIGHT:

会 員 静 動

尾 形 雄 宏	新住所	兵庫県柏原（日赤外科）
鄭 逸 民	〃	大阪市淀川区十三（豊田病院内）
義 和 田 卓 郎	〃	鳥取市（県立中央病院内）
平 光 圭 夫	〃	京都府下与謝郡峯山（丹後中央病院）
中 村 昂	〃	和歌山県有田郡湯浅（有田済生会病院）
美 馬 潔	〃	京大外科教室内
中 原 弘	〃	〃
山 西 誠 三	〃	〃
今 井 敏 彦	〃	市内上京区紫野高繩町25高橋方

編 輯 後 記

- 九州、紀州、に引つづいて南山城の水害は、戦後立上らうとしている日本にとつては、誠に痛い天災であつた。忘れると忘れざるとに拘らず、天災は来るものらしい。救護班を教室からも繰出す程身近におこると、災害のきびしさを身にしみて感じる。立上りかけの外科宝函にはこんな事がおこつてほしくないものである。
- 本号に掲載予定であつた綜説、肺臓免疫の特殊性は都合により次号に掲載する事になつたので御了承願いたい。
- 本誌購読会員数も、投稿者数も、夏の気温と共にぐんぐん上昇して来て、編輯者も汗だくであるが、誠に嬉しい限りである。
- 併し毎度云う事であるが投稿規定を守つて載きた

い。特に文献の記載方法が非常にまちまちである。また欧文文献の場合は必ずタイプで記入して欲しい。人名等は特にそうである。

- 編輯者は最善を尽しているつもりであるが、尚誤植があるのは誠に申し訳ない次第である。只努力あるのみである。

尚前号編輯後記で第一校はすべて著者校正とあるのは誤植で、第一校はすべて編者校正で、希望の場合は第二校目を著者校正とする事になつてゐるから御協力お願いしたい。

- 本誌も復刊以来第6冊目である。次第に軌道に乗つて來つた事は、御同慶に堪えない。

併し道はまだ遠い。一層の御支援をお願いする次第である。

(増田強三記)

松岡道治先生の御長逝を悼みて

松岡道治先生は明治4年12月山口県熊毛郡室積町（現・光市室積町）に生れ、第三高等学校予科、第一高等学校を経て帝国大学医科大学（東京）に進まれ、明治30年12月御卒業になった。直ちに外科教室に入られ、副手、助手、大学院学生を経て明治33年講師を嘱託せられた。適々東京、京都両帝国大学医科大学に整形外科学講座創設の氣運が醸成せらるゝや、先生は明治34年3月京都帝国大学医科大学助教授に任ぜられ外科教室所属となつて来任せられたが、同34年8月矯正外科学研究の命を帯びて独逸に留学、38年7月には医学博士の学位を授与せられ、39年5月帰朝せられた。これより先、明治39年4月23日京都帝国大学医科大学に整形外科学講座増設の勅令が公布せられたが、御帰朝早々の先生は同講座担任を命ぜられ、6月25日整形外科教室主任となられ講義、診療を開始された。聞く所によれば東京帝国大学に整形外科学講座の開設せられたのが明治39年10月との事であるから、京都帝国大学に於ける整形外科学講座の開設は3ヶ月余り之に先んじた事になり、日本に於ける整形外科の草分けは実に松岡先生に外ならなかつたのである。明治40年5月14日京都帝国大学医科大学教授に任ぜられ、爾米大正3年1月7日御退官に至るまで7年有余、教室員も少く極めて恵まれざる環境と闘いつゝひたすら教室の整備充実と新興整形外科学の進歩發達に尽瘁せられた。

先生は先ず研究対象を脊椎カリエスに求め、明治40年以後の日本外科学会に於て毎年研究報告をなさつてゐるが、明治43年4月第11回日本外科学会総会の席上宿題報告として *Berichte über 700 Fälle von Spondylitis tuberculosa* の題下に該疾患の統計的並びに病理解剖学的研究及び其の診断治療に就て報告せられた。又脊椎カリエスと並んで先天性股関節脱臼にも研究を進められ、その業績に就ては日本外科学会及び独逸整形外科雑誌に屢次報告せられたが、明治43年「先天性股関節脱臼及び其の跛行療法」なる一書を著わし、当時我が国に於ては殆んど未開拓の領域にあつた此の疾患の診断治療に対し有力な指針を与えられた。又同じ年「人体畸形矯正学」なる書物を

も上梓された。越えて明治44年恩師 Albers-Schönberg 教授に献呈すべく Atlas der angeborenen Verrenkung des Hüftgelenkes なる著をハンプブルグより出版された。此の図譜の中には先進諸国に於ても未だ研究の進歩を見なかつた新生児先天性股関節脱臼のレ線写真をも収録し独逸専門学界の注目をひく所が少くなかつた。その他先生の研究業績は佝僂病、関節結核、肺門淋巴腺結核のX線診断、脳性小児麻痺、脊柱の強直、コクサ・ワース、畸形性関節炎、脊髄癆性関節症、オステオプサチローデス、エキソストーゼ、貧血性筋攣縮と義布斯縊帶等頗る多方面に亘っている。

大正3年1月教授の職を辞し、大阪北浜に松岡外科病院を開業せられたが、爾来40年の長きに亘り終始一貫黙々として診療に専念せられた。先生には日頃これと言う趣味もなく道楽もなく、只患者を診察し治療する事のみが御仕事であり御趣味であり運動であり又慰めでもあつた。病院を休む事が何よりも嫌いで御発病の前日まで阪神沿線住吉の御本邸から大阪の病院まで八十余歳の老軀をひつさげて通われ、好きな診療に徹底された。

7月30日風邪の気味で床に就かれたが、急性肺炎を御発病、あらゆる手当の甲斐もなく遂に8月7日齢82歳を以て御長逝遊ばされた。今年は日本整形外科の厄年ででもあるのか巨星相次いで墜ちて行く。本邦整形外科の創始者を失つた我々には洵に心淋しき限りであるが、しかし先生御自身は恐らく心ゆく迄診療を楽しみ、何の思い残す事もなく満足して御他界なさつたのではあるまいか。先生の学界に遺された偉大な御功績を偲び、心から御冥福を御祈り申上げる次第である。

昭和28年9月10日

近 藤 鋭 矢